

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第 35 回 今こそ「温故知新自我作古」

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

兵庫県西宮市の阪神甲子園球場では 8 月 6 日から、第 105 回全国高等学校野球選手権大会が始まり、連日、35℃を越す高温と強い陽射しの中、球児たちの熱い戦いが続きました。4 年ぶりに新型コロナウイルス感染症に対する規制がなくなり、応援団が詰めかける 1 塁側、3 塁側のアルプススタンドでは、高校生をはじめ、OB、OG や保護者、地元の応援団、その他のファンたちが汗だくになりながら久しぶりの「声出し応援」を繰り広げました。私も春のセンバツ大会に続いて出場した母校チーム応援のため、新幹線で甲子園に駆け付けました。

いつも暑い中で行われる夏の高校野球ですが、今年の猛暑は特別です。神奈川大会では、主審が試合途中体調不良で交代するシーンがありました。甲子園での全国大会では各試合の 5 回裏終了後に、10 分間のクーリングタイムが設けられていますが、プレー中に選手が倒れたり脚の筋肉が攣ったりするなどして試合が止まることもありました。

今年は台風 7 号の襲来で、15 日の試合はすべて中止になりましたが、例年は大会途中の 15 日正午に、試合を中断して球場にサイレンが鳴り響き、選手、審判団、観客はその場に立って脱帽して頭を垂れ、1 分間の黙とうを捧げます。78 年前の昭和 20 (1945) 年のこの日、大東亜戦争で日本の敗戦が決まり、昭和天皇による玉音放送に臣民（当時の国民の呼称）が涙を流したことは先月のこの欄で書きましたが、その日が毎年、大会中に訪れるのです。

球児たちがどこまで理解しているかわかりませんが、全国民と共に戦没者に哀悼の誠を捧げ、目の前の試合の必勝を期すとともに、日本国の将来のために、国民の 1 人として成長し、立派な社会人になることを誓ってもらいたいものです。戦争は選手たちの父の父の父、即ち、ひいお爺さんの世代以前の出来ごとですが、今の時代があり、平和が続いているのは、その世代である祖先の方々の犠牲の上に成り立っていることを忘れてはいけません。

猛暑と言えば、これも先月のコラムで触れた東京・九段の靖國神社で 7 月 13～16 日に行われた「みたままつり」では、境内が 4 日間にわたり、老若男女で埋め尽くされました。8 月 15 日の終戦の日には、同神社では特に祭礼は行わないものの、厳しい都会の暑さに包まれる本殿前には多くの元軍人やその家族、遺族が訪れ、静かに戦没者の御霊の安寧を祈るとともに、戦後社会の平和を希求する姿が絶えません。

6 日の広島原爆の日には残念ながら、広島市の平和公園で行われた式典の最中、一部の過激な反戦・反核団体が公園外で太鼓を打ち鳴らし、シュプレヒコールを叫ぶ声が響き渡っていました。同

じ広島で今年行われた先進国首脳会議（G7 サミット）を機に、反戦、反核兵器の思いが広がり、
厳肅げんしゆくに原爆被爆者の御霊安かれと世界中の人たちが祈りを捧げている横で、100 人足らずの人たちの心無い行いに、不快な思いを抱いたのは、ラジオでその様子を聞いていた筆者だけではないと思います。

全く話は変わりますが、今年の春、政府は新型コロナウイルス感染症についての分類を、一般のインフルエンザなどと同等のレベルに引き下げました。その時、筆者は、「日本人は、欧米人のように一気にマスクを外すことはない」と書きました。その通り、都内ではその後も 9 割以上の人々がマスク着用を続けていました。しかし、ここにきて、暑さのためか、街中を歩いている人のほとんどがマスクをしていません。公共交通機関の中でも、マスク着用率は 1-2 割でしょう。飲食店などでは設置してあったアクリル板等もほとんどなくなりました。この 3 年余り続いたコロナ禍が完全に過ぎ去ったかのようです。

そうした中で政府やその諮問機関ともんかんでは、「ウイルスが完全になくなったわけではない。第 9 波が起きているかもしれない」と警鐘を鳴らしています。事実、筆者の周辺では、7 月 3 日に 4 年ぶりに開催された大学体育会各部同期会で新型コロナウイルスのクラスターが発生し、出席者の多くが 2-3 日後に発熱や咳に悩まされる事案が発生しました。72-73 歳の高齢者のグループだったので、重症化が心配されましたが、多くの方は軽症で済んだのが不幸中の幸いでした。また、同じころ、ヨットの愛好者グループがコロナ明けを祝って行ったクルージングでも、同じ船に乗り合わせたほぼ全員が罹患りかんしたそうです。私が関係している学校法人でも、理事者や教師の数人が新型コロナ感染症を発症、生徒の間でも患者が複数見つかりました。

コロナ禍は収まったわけではないということを感じた次第です。

筆者の親戚で 8 月 8 日に入院中の病院を退院し別の病院に転院した人がいます。病院では医療従事者はもちろん、患者も家族などの来訪者もマスクは必須で、転院先の病院では 3 日間にわたり、個室でコロナの罹患検査が行われました。しかし、それが終わると、家族のお見舞いは、1 週間に 2 回などの回数制限はありますが、直接会うことはできるようになってきました。

これらの社会情勢を見ても、コロナウイルスはまだ活動をしており、なくなることはないので、普段の生活にコロナ対策を組み込み、できる限り普通の生活に戻ることが必要だということは痛感させられます。

ところが、そこに大きな問題があります。

例えば、大学では 4 年、専門学校では 2-3 年で学生・生徒が入れ代わります。学校行事は毎年同じことをやっているはずですが、3 年以上にわたったコロナ禍の中で、様々な行事が中止や大幅縮小が繰り返されました。その結果、1 年生から卒業まで、多くの行事を体験しないで過ごしてしまうケースが多く見受けられました。また、行事を再開しようと思っても、以前の学年の人たちが積み上げてきたルーティンを経験したことも見たこともない人たちが最上級生として企画していかなければなりません。何十年、百何十年と積み上げてきた伝統がこの 3 年余りの間で継承できな

なくなってしまったのです。

私が所属していた大学体育会柔道部では、140年以上にわたり行われてきたもののコロナ禍で中断した^{かんげいこ}寒稽古をはじめとする様々な行事をこれから再開していきますが、現役学生は手探りの状況で、何があるか、何が間違っているかさえ、判断基準がなくて困っている様子です。

筆者は学生時代から、柔道の師範や学校の教師たちから、「継承すべきものは継承し、改革すべきものは思い切って改革すべきだ。その見極めが大切だ。そういう判断をしっかりと、新しい世の中を築いていこう」と教えられました。

日本には「^{おんこちしんじがさくこ}温故知新自我作古」という言葉があります。「^{ふる}故きを^{たず}温ね、^{われみずか}新しきを知る。我自ら^{いにしえ}古^なを作す」。と読み下します。それでも難しいので解説すると、「昔の人が行っていたことを勉強することにより、現代を知ることができる。それを踏まえて、自分が判断をして、新しい歴史を作っていこう」ということです。

大東亜戦争から長い年月が流れました。また、コロナ禍で先人の経験を引き継ぐことが難しくなっています。だからこそ、色々な人の話を聞き、様々な情報を受け入れて分析し、諸先輩が受け継いできたものをしっかりと把握して、「ポストコロナ」という、人類がこれまでに経験をしたことがない、新しい時代を自ら築いていかなければならないでしょう。